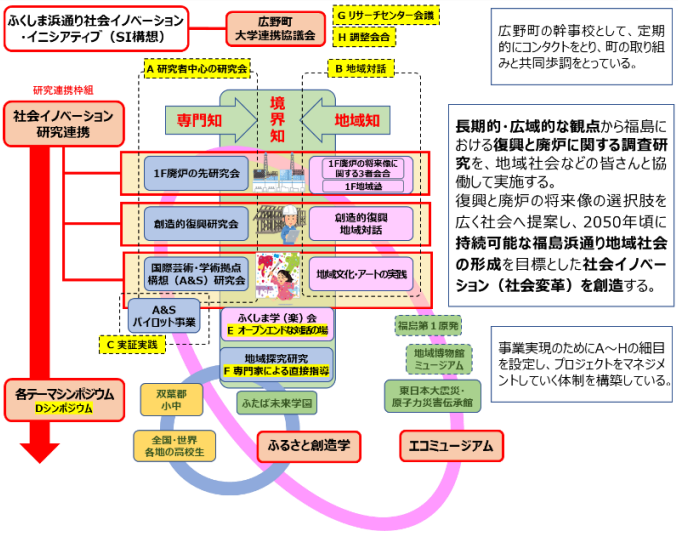
地域・海外リサーチセンター：ふくしま浜通り来創造リサーチセンター	
題目	「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」の具体化と社会実装
著者	松岡俊二、永井祐二、李洸昊、山田美香、中野健太郎、朱鈺、松川きえ、任羽佳

１．研究の概要

社会変革のトリガーとなる「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」の実装を通じて、原子力災害からの地域の創造的復興と持続可能な社会形成を実現する。高大連携と大学間連携により、復興知における社会イノベーション分野の研究拠点を形成し、調査研究や対話の場を活用した人材育成を実施する。

事業の目的及び概要



２．本年度の研究開発、成果

今年度も「福島浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」をベースに、「1F 廃炉の先研究会」と「創造的復興研究会」の研究調査活動を行い、またそれにぶら下げる形で対話の場を設計した。研究会と対話の場は、相互に刺激を与えつつ、双方を高度化させたと考えられる。様々な対話の場には、福島復興への関心の低い西日本の人の参加や、東京電力や原子力規制庁、マスコミが参加し、原子力災害からの創造的復興を考える地域社会との総合的な「対話の場」が形成されたと考えられる。

特に、ふくしま学（楽）会では、「2050 年の福島浜通り地域を考える」「後世・世界への福島原子力災害の教訓の発信を考える」という 2 つの大きなテーマで議論され、福島原子力災害からの復興における、対話や開発やイノベーションとは何か？を再度考える必要性を示唆した。また、「帰還する人」「帰還しない人」「移住してくる人」といった多様な価値観を持つ人々を、国や地方自治体や市民組織が、何を、いつ、どのように支援をすることが「社会的公平性」や「社会的納得性」を確保・醸成でき、持続可能な地域社会の形成に繋がるのか？という点もさらに議論していくべきであることが認識された。創造的復興という掛け声にもかかわらず、巨額の国費投入とハコモノ整備を中心とした今までの福島復興政策は、勤勉や勤労といった地域社会の倫理を歪め、地域社会や地域住民に内在する創造性の発芽を阻害しているようにも見受けられる。この観点から、そもそも創造的復興とは何か、復興において福島浜通りで働くことは何かを議論し、エンパシーやエンゲージメントというキーワードが再度強調された。

このような取り組みは、マスコミにも取り上げられ（『朝日新聞』や NHK など）、「対話の場」の形成の重要性、1F 事故の教訓を未来世代に継承するための社会的仕組みづくりの重要性等が広く認識されるようになった。また、本学の大学・院生が参加した福島浜通り復興研究ワークショップからでは、現地視察や現地の住民、中高生との「対話の場」を通じて、福島復興を「自分ごと化」することができたと考えられる。

本年度の成果

- 1F廃炉の先研究会で検討してきた1Fの世界遺産化のシンポジウム、これらを地域で議論する「1F地域塾」など、国や東電も参加するなど、多様主体の参加で地域でも注目されてきた。
- 大学生の復興視察WSも好評で、高校生との対話を実施するなど、その学びの効果を高めた。
- 感染症対策に対応するため遠隔による対応を確立しており、柔軟な対応が可能となった。

３．次年度の研究計画

次年度も“ふるさと創造学”のプラットフォームを継続運営するため、地域における課題解決研究を維持し、そこへの高校生や様々な世代が参加可能な対話の場、学びの場を維持・継続する。「境界知作業者」育成を念頭に高大連携・地域外学生の交流モデルなどの複数の人材育成ロールモデルを構築することで、ふたば未来学園から本学への進学実績が積み重ね、本学の推薦枠として生徒の受入を実現する。また、連携大学の枠組みを拡大し、人材育成対象も拡大する。域外の学生の参加カリキュラムに関しては、自立的に運営できる枠組みを構築する。最終的には、「科学技術と社会の新しい関係におけるイノベーション研究」に関して、国際研究教育拠点と連携し、原子力災害の教訓を人類と共有できる社会科学研究の世界的な拠点の構築をめざす。